「風、薫る」と、啄木を看た「Ｆといふ看護婦」

函館市医師会
函館市医師会健診検査センター　水関（みずせき）　清（きよし）

「いつとなく、記憶に残りぬ――
　Ｆといふ看護婦の手の
　つめたさなども。」

標記は、石川啄木の没後に遺稿をまとめた歌集『悲しき玩具』の134番歌、初出は「新日本」1911（明治44）年７月号である。その題材は、東京帝国大学医科大学附属医院に入院していた、同年２月４日から３月15日までの間の出来事から採られているが、詠唱時期は、その約４カ月後の同年６月７日から12日までの間である。

「Ｆといふ看護婦」とは、「福井しん」さん。1884（明治17）年10月12日生まれで、1886（明治19）年２月20日生まれの啄木よりわずかに年長。1904（明治37）年11月に東京帝国大学医科大学附属医院看病法講習科（のちの東京大学医学部附属看護学校）に入学後、翌年に卒業して正規の看護婦になった。1900年の服務心得に「看病婦ハ職員ノ指揮ヲ受ケテ患者ヲ看護シ兼テ病室内ノ用務ニ従事スヘシ」と、看護職である旨が明確に規定されていた。勤務体制は、当直を含めて病室ごとに割り当てがあり、勤務時間は、午前８時から午後６時までの10時間労働のほかに、受け持ちの病室に２日に１回は泊まる宿直をこなしていたという。

「Ｆ」さん（以下、福井さん）が啄木を担当したのは卒後６年の頃で、職業婦人としての経験を積み重ねていた。啄木が施療患者として入院したのは２月４日土曜日、病室は青山内科18号室（筆者注：結核室）。福井さんの記憶によると、啄木の看護にあたったのは、２月４日から15日の午前までだったという。

啄木の明治四十四年当用日記から、この間の出来事と入院に至る経緯について振り返っておく。

一月二十七日　五六日前から腹が張ってしやうがない。飯も食へるし、通じもある。それでゐて腹一帯が堅く張って坐つたりする時多少の不自由を感じる。

一月二十九日　腹がまた大きくなつたやうで、坐つても多少苦しい。

二月一日　大学の三浦内科へ行って（中略）一目見て「これは大変だ」と言ふ。病名は慢性腹膜炎。

二月四日　二時半にこの大学病院青山内科十八号室の人となった。同室の人二人、夕方有馬学士の診察。

二月七日　手術をうけた。下腹に穴をあけて水をとるのである。護謨の管を伝って落つるウヰスキイ色の液体が一升五合許りになつた時、予は一時に非常な空腹に襲はれたやうに感じて、冗談をいひながら気を遠くした。手術はそれで中止、すぐに仰向に寝せられてまた苦しい冗談をいひながら赤酒を一口のんだ。後はいい気持だつたが、腹にはまるで力がなかつた。（ゴシック：筆者）

二月八日　午前に青山博士の回診があった。

二月十日　昨日と今日、午後に少し熱が出た。水も少したまったらしい。

二月十二日　また腹がふくれた。

二月十四日　少し許り熱が出て、午後は不愉快だった。（中略）看護婦は「続怪談揃」といふ本を持つて来て貸してくれた。

二月十五日　青山博士の廻診があつて、余病がないといふことがわかつた。（中略）十二人部屋の広い五号室に移った。

注目すべきは、２月７日の出来事である。腹水をとるためにゴム管を挿入したら、出てきた液体はウィスキー色をしており、2,700mlもの排液を得た後、啄木は失神し、赤酒を飲まされた、という記述である。短時間の排液による静脈圧の低下を避けるために、排液速度は30分で500mlまでにする、などのことは現在の教育では常識となっているが、当時は東大病院ですら、そうした知識は未普及だったのだろうか。

この一連の診療行為に看護婦として加わっていたのは、勤務体制から考えて、福井さんであった可能性が高い。そう考えると、結句にみられる一字下げと、句点をともなう「も。」が暗示するのは、入院の契機となった「腹水貯留」という、啄木が感ずる身体上の異変の上に、治療行為としての腹水排液後の失神という緊急時の体験が重ね合わされ、これらの体験を福井さんの手の「つめたさ」が覆っている、ということになろうか。さらに、処置後に発熱した啄木に、「続怪談揃」という本を貸したのも、部屋担当看護婦であった福井さんと思われる。これが、「怪談」を読むことで、気分の上だけでも熱さましに、という洒落っ気から出たものであれば、検脈の際の手の冷たさとともに、過酷な勤務条件の中で余裕を失わない態度が、啄木に強い印象を与えたと推察される。

福井さんが卒業した看病法講習科の来歴をたどると、大関和（ちか）と鈴木雅子という逸材にたどりつく。1887（明治20）年10月27日からAgnes Vetchによる「看護法講義及看病術実地練習」が開始される際に、実習委託生として、同年１月に桜井女学校付属看護婦養成所に第１期生として入学後に約10カ月間にわたって看護の心得などの講義を受講していた大関和らを受け入れたことに始まるからである。修業期間は１年で、翌年10月26日に卒業しているが、Vetchの任期もこの日までであった。桜井女学校側の事情で、看護婦養成所の募集が１年間中断された際には連動して実習委託生の募集も中断されたが、再開後の1889（明治22）年には、名称を「看病法練習科」に改めて、１年コースで桜井女学校から４名を受け入れた。その後も戦前は、基本的に年一度の募集が続けられた。

大関と鈴木のその後に短くふれる。帝国大学医科大学附属第一医院において、大関は外科の、鈴木は内科の、それぞれ看護婦取締役（看護婦長）を務めた後、鈴木が1891（明治24）年に東京本郷に創設した慈善看護婦会（後の東京看護婦会）に、大関が教師として加わり、後に鈴木の後継者として会頭となった。なお、これらの来歴をオマージュした「風、薫る」は、2026年度前期のNHK朝の連続テレビ小説として放映中である。

福井さんが入学したのは、1904（明治37）年11月のことであり、看病法講習科を立ち上げた逸材たちの時代から10年余の時間が経過していた。啄木の看護にあたった、卒後６年の頃の勤務条件も、基本的に住み込みで夜勤もある過酷なものであった。その中でも「続怪談揃」を貸し与えた（らしい）逞しさを併せ持っていた女性への啄木からのエールが、標記の歌の行間から聞こえてくる。